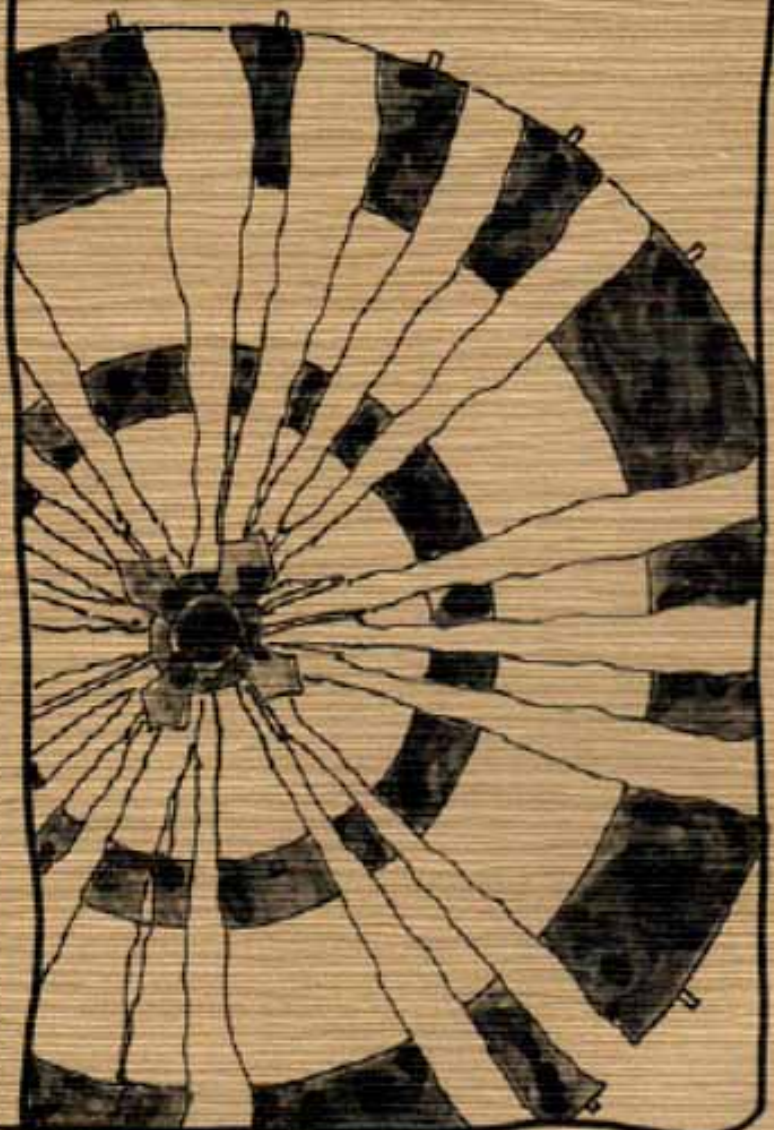


やぶれ傘



一二三三三

一九二二年十二月

雪吊の張り出してゐる下に鯉 根橋宏次
 秋の蚊の羽音時計は午前二時 きくちきみえ
 冬田道どうやら知らぬ人がくる 大島英昭
 新しき切株ふたつ枯木立 藤井美晴
 公園のぎつたんばつこ木の葉散る 廣瀬雅男
 暖房が効いて甘めのジンフーズ 青谷小枝
 捨ておきし鉢に紫式部の実 丑久保 勲
 柳散る閑伽桶棚に古束子 瀬島酒望
 陰にある流れに冬の鯉群れて 小山よる
 赤子鳴くこゑは刈田の向こうから 秋山信行
 アナウンサー頻りに今日の寒さ言ふ 安藤久美子
 城跡に薄日差しけり返り花 天野美登里
 冬の川星のまたたく空浮かべ 白石正躬
 種茄子が埃に塗れ畝隅に 渡邊孝彦
 撫でさすり棺に入れる冬帽子 有賀昌子

抄 集 句 傘 ぶ れ や

大崎 紀夫 選

早く来いと妻に呼ばれる十三夜 浅嶋 肇
 露寒や朝餉の碗にもろ手当て 石原健二
 トラツクの後追ひかけてゆく落葉 泉 一九
 木漏れ日が畳に揺るる冬隣 奥田温子
 秋うらら富士の裾野に雲の帯 亀岡睦子
 後輩が呼びかけてをり赤い羽根 木村瑞枝
 匙の音立ててカレーを暮の秋 倉澤節子
 小春日の坂下りきればオホーツク 小泉里香
 竹寺の膳に紫式部の実 小巻若菜
 秋逝けり惜しむ暇もなきままに 竹内文夫
 さくさくと砂利ふみ夫と菊花展 貫井照子
 月白の田圃に犬の声のして 萩原溪人
 足裏に湿布小さく十三夜 橋本美代
 青空をつくづく見遣る秋の暮 本郷美代子
 寒き朝靴音ひびくコンコース 吉田幸恵

浅嶋肇

墓詣で帰路はいつもの畑道
本を閉づ水引草を朶とし
ひとところ白く群れ咲く曼珠沙華
早く来いと妻に呼ぼるる十三夜
衣被ぎ無口同士が酌み交はす
論客の携へ来たる新走り
朝寒の列の揃はぬ登校児

石塚清文

無人駅のベンチを占める赤とんぼ
仕送りは母の便りと今年米
秋ともし木馬にひとり座りぬる
蕎麦の花少女指さす十勝岳
畑隅に白き冬瓜捨てられて
竹柵の支柱に絡む山ぶだう
しもた屋はひとり住まひか吊るし柿

石原健二

日差しなき道に蟪蛄斧を上げ
用水の土手に紅白彼岸花
銀杏を踏んで思はず木を仰ぎ
送られしかぼすに妻は旅気分
露寒や朝餉の碗にもろ手当て
刈りあとが藁で覆はれる冬田
川涸れて白石目立つ流れあと

泉一九

北上川にうなぎ釣る人雨の中
洞門の右手向うに芒原
紅葉の途切れしところ村の墓
朝寒や腕をくの字に早歩き
トラツクの後追ひかけてゆく落葉
北風に二羽離れずに飛ぶかもめ
長旅を終へて今マ宵の干し蒲団

伊藤 薫

花の名を知らずに歩く秋の道
窓側に座席を取りて初紅葉
カサコソと桜落葉を犬が踏む
秋風を駅の柱に除ける夜
月の夜はふと歌が出る帰り道
吊るし柿ビニール紐で結びをり
银杏散るデパート前の喫煙所

岩藤 礼子

秋の風物言ひさうな犬の目に
実むらさき芭蕉の像は北を指し
秋高し心ばかりの寄付をして
秋時雨傘持たぬ子はダッシュして
予報より天気が良くて公孫樹散る
妙な夢続き十一月に入る
花八手骨をほめられ一生閉づ

江口 恵子

早朝のシャツターチャンス紅葉
剥きたての林檎ひとくち名著読む
農作業終へ塩茹での落花生
ペランダに折りたたみ椅子月見酒
虫の音の聞こゆる庭に灯り当て
バランスを取りつつ進む蓮根掘
とりどりの小皿の料理秋うらら

奥田 温子

縁側に座布団二枚つくつくし
郵便受に大梨二個の届け物
新唐辛子厨につれば華やける
木漏れ日が畳に揺るる冬隣
石露の黄の昏れかねてゐる勝手口
蜘蛛の巣にかかる木の葉の紅葉づりて
実千両熟したるらし鳥の来て

齊に椋鳥鳴き始む夜の明け
 白粉の花の黄色赤白朝の土手
 木犀の香りマスキの内
 座布団を並べ妹待つ秋の昼
 立ち話手足を残る蚊に刺され
 温かなスープレの欲しい秋の朝
 門柱の裏も表も
 蛩草

亀岡睦子

風来れば頬に手をやる秋半ば
 秋うらら富士の裾野に雲の帯
 日が暮れて梢に残る柿ひとつ
 重い重いと大根運ぶ幼き子
 秋湿り庭に小さな水溜り
 観劇の帰りの寒ささほどとは
 毛糸編む手元暗くて日暮かな万

木村瑞枝

秋の午後ピアノの上の置時計
 後輩が呼びかけてをり赤い羽根
 秋晴れ間パン焼きあがる音のして
 道ばたの末枯に日のとどきをり
 朝寒の葉罐の湯気が立ちはじめ
 暮るるころ草の錦に小雨きて
 肉饅をはふはふと食ぶ秋の午後

倉澤節子

匙の音立ててカレーを暮の秋
 小説の文字が小さし地虫鳴く
 小鳥来る鳥類凶鑑めちぎりぬて
 山査子の実には赤々とぎれ雲
 虫集く御苑で犬が吠えてぬる
 冬ぬくし指型クグリムパンふたつ
 小春日のジャングルジムに雀来る

夕顔のすぼみきれない朝の雲
孫の手が秋風つかむ空つかむ
残る葉を落とすから梅もどき
鳥威ししペットボトルと長靴と
落葉してベントチは風の通り道
見沼田は風の耳を掠めけり
秋風が散歩の耳を掠めけり

黒澤次郎

苔庭の隅にひとむら石露の花
庭隅のひと木に蜜柑生りにけり
冬の蠅ながめて我も動かざる
一斉に蒲団干されてゐたかな
冬風や島かげ近くまた遠く
水槽の底に海鼠が並びぬる
雪吊に日暮れの雨が降ってくる

小池一司

やうやくに泣き止む赤児りんごの香
夫と子の寝息ちぐはぐなる夜長
友を待つ秋明菊の明るさと
夜通しの雨止み鴉の声しきり
蓑虫は闇と風とを住処とす
小春日の坂下りきればオホーツク
寒暁の沖に漁火七つ八つ

小泉里香

バス降りて劇場までの秋時雨
待宵の明かりを肩に子の戻る
柿ひとつ色艶良きを供へけり
竹寺の膳に紫式部の実
日の差せば花へと秋の蜩蝶
里芋を煮含めたり四日月
茶柱の立つ朝なり秋深む

小巻若菜

坂本和穂

初鴨を見ながら歩く利根堤
秋うらら青い服着た園児たち
日光の宿の紅葉と今朝のパン
秋晴れの今朝の散歩は三千歩
園児らが走る向うに案山子立つ
駅前のすし屋閉店冬隣
朝どれの冬菜三把を届けくる

佐藤稲子

拾はれぬ銀杏あまた樹のまはり
歌ひつつ行きし木道吾亦紅
十月の沼に蒲の穂十二十
車ゆくたびに落葉は舞ひ上がり
時雨あてをちこちひかる鎖樋
庭の木に巣箱のふたつ冬紅葉
小六月鯉がゆつくり橋くぐる

眞田忠雄

落し堀の欄干で待つ小望月
救急車のゆく音幽か秋の星
特大の冬瓜供へ芋名月
さつまいも干しをり庭の一筵
抽ん出る稗の根つこを抉り取り
近寄れば蛙くると葉の裏へ
庭に立つ琉球の甕十三夜

柴崎和男

秋彼岸便座の電気入れにけり
秋海棠隣家は土地を売りしとか
岩波ホール出れば南に秋の月
「大黒柱」とは言はれずに敬老日
秋の蜘蛛まるまる肥えて動かざる
午前零時十一月へ夜の雨
十一月顆粒の葉振つてみる

◇1月・2月の句会案内

月	日	時	句会名	会場	連絡先
1月	4日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	4日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	5日(水)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン3	丑久保 勲
	7日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	7日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	15日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	22日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	22日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室
2月	1日(火)	AM9:00	こなから会	あいバル	WEP編集室
	1日(火)	PM6:00	うらら会	浦和コミセン3	大島英昭
	4日(金)	AM10:00	NHK大崎教室	さいたまアリーナ	NHK文化センター
	4日(金)	PM6:00	なごみ会	浦和コミセン3	秋山信行
	7日(月)	PM6:00	ぎんなん会	浦和コミセン2	丑久保 勲
	19日(土)	PM2:00	セニョリータ句会	WEP俳句教室	藤井美晴
	20日(日)	AM10:00	吟行会(下記注)	大宮第2公園梅園	丑久保 勲
	26日(土)	AM10:00	楽天会	あいバル	廣瀬雅男
	26日(土)	PM2:00	やぶれ傘句会	WEP俳句教室	WEP編集室

[注] ぎんなん会は奇数月は第1水曜、偶数月は第1月曜です。

2月20日(日)の吟行。

午後の句会場が取れず、2時の集合。句会は6時より。

集合 午後2時。JR大宮駅中央改札口前。

吟行地 さいたま市・大宮第2公園の梅園。

句会場 武蔵浦和コミセン・第1集会室

風 冬 雨 秋 秋 草 秋
 の 晴 後 の の 原 祭
 昼 れ の 空 の 浜 を り
 影 の 朝 う 素 は 一
 ゆ 川 輝 つ 足 は や 座
 ら 面 く し で か の
 ゆ 眩 銀 海 砂 な 囃
 ら く 杏 の を 風 子
 と 光 落 ま 感 駆 響
 白 り 葉 つ じ ぬ き
 障 を か 青 ゐ ぬ け り
 子 り な な る る

高橋宜治

朝 追 老 二 ぼ 温 ニ
 寒 加 い 杯 ん め ャ
 や して て 目 り や 酒 ス
 も て よ の の 栗 と 少 し 読
 の 新 そ 乱 飯 喰 など の 胸
 見 ば 二 読 の 夜 更 け ぬ も
 前 枚 吸 け せ 秋 灯 な り き
 に 眼 鏡 拭 くり

高橋均

◎連絡先 秋山信行 ☎048-874-0555 藤井美晴 ☎0422-55-2733
 大島英昭 ☎048-592-5041 WEP編集室 ☎03-5368-1870
 廣瀬雅男 ☎048-443-7522 丑久保 勲 ☎048-853-3856